

体験の認知的構造

— 感情体験の理論仮説を中心に —

水 島 恵 一

Structure of Feeling and “Experience as a Whole”

Keiichi Mizushima

Many psychological theories concerning personality and human experience are interested in cognitive structure and its testing process. In this paper a cognitive theory of “experience as a whole” (intellectual, motivational, emotional, etc.) is developed.

Recent cognitive theories such as Neisser’s concerning to adjustment toward the outer world are adaptable mostly to the inner adjustment in which psychotherapeutic re-experience as well as the felt self imagery is important. Also schema of feeling and its testing process are theorized similarly to the theory of intellectual schema and its testing process. On the other hand we find less structured, less anticipatory, passive form of experience concerning to feelings and emotions. Structure of mental imagery (its schemata, script, etc.) shows also uniqueness beyond the ordinary cognitive theories. These may ask us a new cognitive point of view where psychoanalytic, organismic and phenomenological personality theories should be integrated.

1. 問題提起 (体験の諸側面)

現在、われわれは、「体験と意識」に関する総合研究を展開しているが、その基礎理論のひとつとして、感情過程をも位置づける体験的認知に関する理論が、不可欠である。従来、感情に関する構造的理論は、精神力学にゆだねられてきた面が大きく、あるいは、それをエネルギー的側面としてとらえたり、せいぜい構造的安定、不安定の結果としてとらえることが多かった。これらはもちろん、それぞれ重要な側面をえがき出しているには

違いないが、しかしわれわれが日常扱っている感情体験は、一定の構造をもった全体的体験と不可分のものである。そこで本論では、体験を全人間的なものとしてとらえ、その諸側面として様々なシエマ（本論では広義に用いる）が現出すること、そのひとつとして感情的シエマもとらえられ、それが、現代認知理論的な意味で人を感情体験に選択的に立ち向わせること、また逆に体験によってシエマが修正、発展させられることを前提として論を出発させたい。この前提に立った吟味により感情を中心とした体験と意識の構造をどこ

まで認知心理学的にとらえるか、どこからが従来の認知理論の限界になるかを明らかにしたい。

われわれが「心」と呼んでいるものは、(知的)認知・感情・欲求等々の(知情意的)諸側面から構造的に把握しうる全体的な体験過程であり、それは、概念化されない面(イメージも含む)、漠然と地に感じとられる面(Gendlinのimplicitな過程を含む)、象徴的にのみ感じとられる面(Jungの原始類型を含む)、その他の未知の面を含んでいる。

体験過程を思考・感情・欲求等々の異なった面から構造化してとらえる時には、異なったシエマが現出する。(もちろん同じ感情面の中でも視点を変えれば異なったシエマが現出する)したがって、また異なった理論や操作的研究法が成立する。これらの諸側面の構造ないし、理論(モデル)は、相互に相補的である(水島1980)。

さらにわれわれは、対外的適応の場合と対内的適応の場合で、シエマないし検証の過程に差のあることも知っている。対外的適応のシエマは、個体と外界の系の調節シエマであり、個体の側からすれば関係調節のシエマだといえる。これに対して、対内的な面は、主としてホメオステシスを含んだ内的自己調節のシエマである。そしてわれわれが「知的」と呼ぶ探索にも、「感情的」と呼ぶ探索にもこの双方の側面が含まれていると考えられる。

「体験全体」を科学しようとするとき、われわれは、何らかの断面または軸の上に投影されたシエマを問わざるを得ない。いまここで最も問題にしている軸としては、①対外的適応の側面対内的適応の側面、②体験の知的側面対感情的側面、③シエマの概念的側面対前概念的側面が重要である。従来の理論では、ともすれば相関、近接した軸の間に混同がみられ、このため知的シエマに対する感情的シエマを論じながら、実は、外的適応に対する内的適応の特徴を論じるなどの混同があ

った。実際、臨床心理・精神分析領域では、主として対内的・感情的・前概念的適応を不可分に問題にすることが多く、これに対して認知心理学の主流が対外的・知的・概念的適応のシエマを問題にしているため、その対比においては、上述の①②③の軸が未分化にとらえられることが多い。われわれは、その不可分な面(したがってそれぞれ独立の直交軸とは見なせない面)を認めつつも論理的混乱を避けるために、各々を別々の軸として図1中央のようにとらえることにする。(後の吟味において、能動-受動を含めたさらに多くの軸を設定することになる。)

図1では、この全体性を軸の原点においてとらえたものを「生きる姿勢」と呼んでいる。少くとも能動態としては、人々はこの姿勢の整合性を構造原理として持つ。それは、右側の感情欲求を反映しながら、より左側の知識の体系や操作性などにもつながる。それは対外的側面としては、生活の知恵・生活意識等となり、対内的には、自己概念、自己イメージ等をふまえた内的態度、実存様式となる。(おそらく、Identityの基本はここに見出すことができるであろう)。なお図1で、「生きる姿勢」と表裏をなしている「体験様式」は、より受動態をも抱攝した概念であるが、このことは後に記す。(広義の感情体験とは、口軸右端に限らず、むしろこの原点を中心とした、受動態をも含めた広がりをもつ全体だといえる。)

いずれにしても我々がここで問題にしているのは、体験的認知であって単なる体験の認知ではない。したがって感情面に着目する時は、体験的(知情意不可分の)全体性の中で感情的に体験がなされるその力動が問われる。従来多くの研究は、感情の、あるいは感情についての(知的)認知に焦点をあててきた面が多く、対象の内容として欲求や感情を問題にしてきただけであって、それをとらえるシエマは知的であった。そこでシエマの総体と

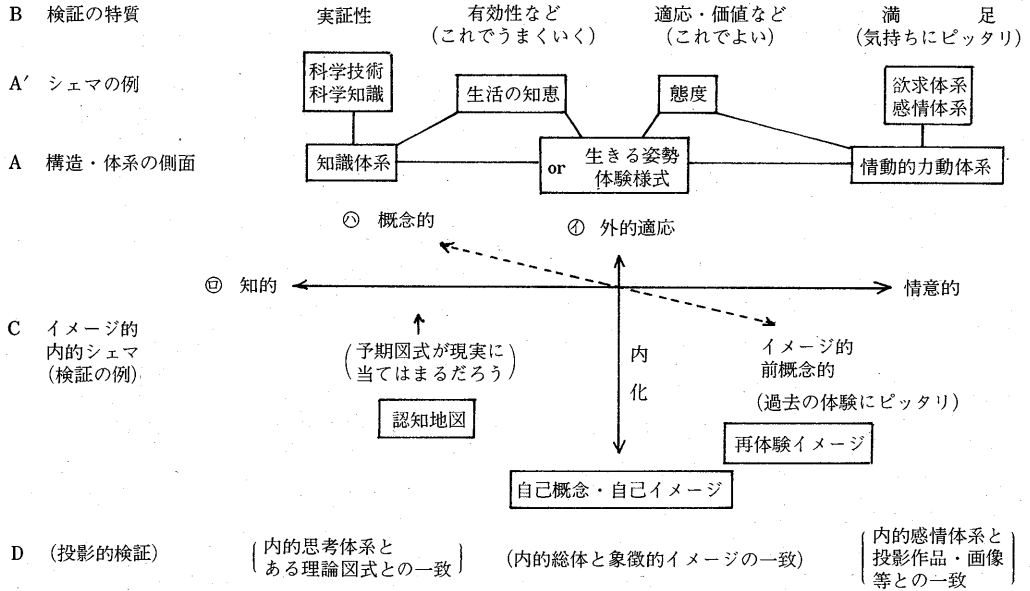


図1 構造とその検証の諸側面

して「知識の体系」が問題になり、それは知識の要素とその関係性ないし構造（それについての自分なりの理論）だったとすることができる。これに対してここで言う体験的認知のシェマとは、認知の仕方そのものの知情意不可分性すなわち外界とのかかわり方の様式である。それは、その個人なりの体系であり、価値、目的、方法、技術、好み等々の要素とその関連性を含むものである。

注) 感情や欲求をエネルギーないし動機づけの側面からとらえ、認知構造としてはあくまで知的なものに限定する立場からすれば、ある感情体験は、非構造的な情動と「感情判断」に分解してとらえられることになる。しかし生々した感情体験をこの両者に分解したときは、ニュアンスも生々しさも失った別物になってしまうことは、臨床や芸術などで常に明らかにされている。木村重信「はじめにイメージありき」に見られるように体験シェマの生命的不可分性は、概念的側面からのアプローチによってはとらえきれない。

2. 照合の原理 (ピッタリ体験とその質)

認知心理学が、「知識の体系」を「外界」にあてはめて検証する過程を重視した (Neisser) のに対し、本論では、上述のように個人の体験様式ないし生きる姿勢としての体系が、外界および内界にあてはめられる過程が重視される。ここでその検証の基準となるものは、体験的照合、すなわち広義の「ピッタリする体験」に求められる。「ピッタリ体験」とは、実験的・実践的検証、理論的整合性、欲求満足、感情の適切な表現、心的統合等々のすべてを含む自己内外一致・照合体験を意味する。この「ピッタリ」を求めて人は、自己・現実を吟味し、内的自己調節や関係調節 (すなわち生活) を営んでいる。

体験的認知理論の大目的を、従来の認知心理学と明確に区別する原点は、ここにある。知的認知に関する限り、そのシェマは実験的検証ができる。端的には、コンピューターに組み込まれ、シミュレートできる。したがっ

て常により統合的で整合的なモデルを作っては、操作的に検証するという手続きがイメージされる。しかし体験的認知においては、感情も意志も伴ったシエマによってまきに生きることが、「検証」の過程である。それは内的自己調節と成長傾向をもつ開放系としての有機体の活動を通じ「ピッタリ」した体験的感覚をもってこそないうる生き生きした手続きである。

図1の全体は、前述した④対外—対内及び⑤知的一情的の2軸に沿ってシエマAとその照合B（ピッタリしかた）の総合的な関係をあらわしたものである。上段すなわち対外的生活体験が、基礎であるが、横軸の各欄の照合過程を命題化して言えば「人は、すでにもっているシエマAをもって外的経験にのぞみ、Aを外界にあてはめて、Bの（ ）のような具合に、ピッタリするか否かを確認、できるだけピッタリする方向にシエマAを調節し、それによって自己構造（シエマの全体系）を発展させる。」ということが出来る。たとえば、原点である「生きる姿勢」を例にとれば、「人は、すでにもっている自分なりの生きる姿勢をもって、外的経験にのぞみ、その生き方を外界にあてはめて、適応・価値等々を含んだ意味で、ピッタリするか否かを確認、できるだけピッタリする方向に自分なりの生き方を調節し、それによって生きる姿勢を統合・発展させる。」ということになる。同様にして、知識の体系は実証されつつ形成・発展し、欲求体系は、自分なりの気持ちを外界にあてはめつつ形成・吟味されていく。

注) ここで第1に横軸にそって右ほど（すなわち感情的な面が強調されるほど）シエマは個別的具体的になる。それはKellyがConstruct 構造を個人に個別的なものとしてとらえたことと同様である。一方照合の過程も「他人はともかく自分はこれでよい」「こういう場合にピッタリだ」というような個別的具体的な面が重んじられる。また「ピッタリ」の

規準は多義的で曖昧である。知的には真の回答が唯一しかない場合でも、感情欲求の回答は多数存在する。体験の科学が成立しえても、体験的科学的成立が困難なゆえんである。

ここで、事象へのかかわり方によって「ピッタリ体験」すなわち照合の意味に差が生じるという事実われわれは直面する。いままで述べてきた能動のかかわり方が、シエマの検証 → 修正という循環的調節、発展の過程を基本とするのに対して、受動的な味わうようなかかわり方においては、かなり違った原理が考えられなければならない。対外的な面だけをとって見ても、feeling すなわち「感じ方」という意味での感情のシエマにおいては、欲求のように満足を指標とした検証と修正の過程は成立しない。同様にして「生きる姿勢」は、それを外界にあてはめて検証・修正するという循環にただちに結びつくが、受動態をも含めた「体験様式」は、異った検証のニュアンスをもつと考えなければならない。

この点の真の明確化は、今後の問題であろう。すでに前述した図1の検証過程の解説において「シエマを外界にあてはめて吟味することと、「シエマによって外界を選択することとのニュアンスの差があった。これは、いま述べた能動・受動と関係しており、われわれは能動的な「生きる姿勢」を外界にあてはめてそのシエマを修正するのに対して、体験様式や「感じ方」は、それによって事象を切断し選択するニュアンスが強く、修正も起りにくい。しかしこの差は、能動・受動の差と全くイコールではなく、受動的知覚シエマもやはり検証される。実はこのズレは知識の体系についてもいえることである。シエマによる知覚という従来の認知理論が、修正・発展過程を必ずしも説明していないゆえんのものにも通じる。一方純受動的には、たとえばLSD服用時におけるように、選択的知覚すら崩れて事象が（無構造に近い形で）訪れてく

る。これらを総括するためには、極めて相互に近似はしているが、しかしそれぞれ異った軸を多く設定して考えなければならぬ。

以上を便宜上、能動—受動という軸でざっぱに代表し総括すれば、能動的・予期的な（あるいは命題を検証しようとする）枠組まれた一貫した姿勢の強い過程に対して、一方では、受動的、非予期的な（あるがままの）枠づけの弱い、むしろニュアンスを尊ぶような外界とのそのつどのかかわり方を否定することはできない。この後者は、非道具的、非目的、純粹経験的、観想的な状況あるいは、催眠その他の受動的状態のもとで観察されやすいわけであるが、それが「無前提の認知」として、現象学で強調されてきたものにつながることは否定できず、あえて言えば、「シエマを検証する」よりも「現象をしてシエマを結実させる」ようなものである。むしろ知覚もシエマを持っているわけであるから、全く無前提の現象学的認知が成立するわけではなく、あくまで構造化の程度、その硬さ、それに主体的にかける度合、予期の度合等々に関する程度の問題ではある。しかしわれわれが直面するかなり漠然とした感情やイメージ体験に目をあてれば、認知の構図を比較的ゆるめた極を問題にしなければならない。

ここにも認知心理学を大幅に修正する観点がある。われわれは、潜在構造（生物学的には遺伝子の情報構造なども含む）を前提とする意味で、全体的構造理論の枠内にとどまるが、しかし従来の命題理論と対極的に、きわめてゆるい構造を認めざるをえない。そこにおいてこそ「現象をして自らを語らしめる」「無前提になってこそ精神病患者や未開社会人の心がみえてくる」といわしめるような認知が訪れる（終局的に構造をも超えるものについては水島1977）。対外的な面に限ってみても、感情体験の構造的側面は、このような構造のゆるい、非予期的受動面を多くもつ。感情体験は「感じ方」のシエマによって選択され

はするが、しかし逆に、ほとんど無条件に胸に迫るように感じとられる場合もあり、その構造化の程度も多様である。まして次節で問題にする内的感情体験においては、このことはさらに問題になるであろう。

注) あえて大胆に人間学的考察を加えれば、シエマの能動的適応とその検証（論理的・概念的・予期的な面が強い）が、自然界を予測統制し、技術文明、利益社会を發展させ、主客、個と普遍を分化させる西欧的な体験様式、生きる姿勢のシエマであるのに対し、逆の側面は、自然界と融合する東洋的なものであり、受動的に世界を知覚し味わうようなものである。それは目的を持たないが故に修正されることもなく主客未分、知情意未分の原点に戻りやすいような体験である。この双方の面は、人間学的相補性をもつと言ってよいかも知れない。

なお、前述したように、受動性、非予期性、構造のゆるさ等々は、すべて関連はしているが全く同じものではない。「生きる姿勢」に対する「体験様式」、「欲求体系」に対する「感じ方」など図1の下段に示したものは、感情研究にとって極めて重要な受動型のテーマであるが、明確な構造をもったものである。一方能動的な生きる姿勢においてもゆるい構造は存在する。これらのニュアンスの差によって、シエマによる切断とシエマの検証という認知心理学的命題が、様々なヴァリエーションをもつ点が、重要であり、今後の大きな理論的課題である。

なおすでに能動—受動の軸をわれわれは、第4の軸として図1に事実上付加して論じ、それも必ずしも1本の軸でないものとして論じてきている。同様にして細かな考察を進めていけば、対象を客体的にとらえるか、主体として交わるか、構造が顕在的か潜在的か（図的か地的か）、構造をより空間的ないし図式的にとらえるか、より時間的ないしscript

的にとらえるかなどが、それぞれ軸として（相互に独立ではないが）設定されるわけであり、このような様々な軸による切断（したがって様々な面からの見方）が、最終的には総合されなければならないわけである。

3. 内的体験

ここでいよいよわれわれは、従来の認知心理学から最も遠い内的体験の領域に入らなければならない。内的体験には、身体感覚のように本来内的なものもあるが、本来外的経験であるところのものが、記憶、内的感情等々して内化され、対象化された場合が多く、したがって主に内化としてとらえられる。

内化は、まず、知覚、生活循環からの分離である。それは外的状況のウエイトが下った時（ひとりになった時、挫折した時等）に単純な記憶優位の過程としても観察されるし、充たでないかわりや未消化部分を再調節するための一時的隠遁の場合もあり、未消化な complex への本格的固着の場合もある。このうち外的事象の記憶と行為の予期が重なり合い、予期図式（とくにイメージ・認知地図が）結実する過程は、Neisser が明らかにしているが、感情面での内化においては、その感情に対処する過程が最大の問題である。それは典型的には、心理治療にみられるような再体験であり、この再体験によってこそ、スキーマの再編成も知情意総体として可能になる。それは未消化な感情をあたかもその時点にもどって実体験するようなものである。ただし、これが純粋な記憶再生としてなされる場合は、心理療法としては必ずしも多くなく、多かれ少なかれ（多くの体験を総括する意味で）象徴化されてイメージ script として現出する場合が多い。ひとつの外傷体験の場合とはもかく、多くの問題点をかかえた人の実感的再体験的治療過程がイメージを媒介にしやすいゆえんである（日常生活における再体験は次節にゆずる）。

このような内化が進めば自己の内的状態が感覚的・イメージ的に結実し、それが独自の内的世界を構成するに至る。諸パーソナリティ理論によってとらえられた「自己」とは、そのようなものであり、自己の理論的認知と体験的認知の相補関係（水島1980）は、まさにこのような内化の次元における口の軸すなわち知的・情意的極の相補的統合にほかならない。

要約すると、記憶を始めとして現実関係から退いた内化は、認知地図のようにただちに再外化されて外的適応を検証するものから、純粋に内的自己調節の意味をもつ場合に至るまで様々な段階がある。再体験的に言えば、あるひとつの過去の体験（主として外傷体験）を純記憶的に消化する場合から、多くの慢性的体験を（比較的象徴的に）再体験することをへて、極端に抽象化ないし象徴化されたイメージとして再体験（一種の自己洞察）に至るまでの連続的段階がある。この後者は、前者と全く同じではないが、近似した軸として（適応という output 面でなく）自己の内部から input された情報処理過程だと言うことができる。しかしいずれにしてもこの限りにおいては、対内的認知スキーマと内的体験との一致、不一致（検証）とそれによるスキーマの修正という認知理論は成立する。すなわち内的スキーマ（自己概念）によって経験が、取捨選択され枠づけられ、逆に異質ないし未消化な経験を同化すべく、スキーマが調節されるという認知の基本原則が、自己認知にもあてはまるわけである。

しかし前節にもふれたように感情的・受動的な面は、スキーマによってある程度選択はされるが、しかしそれによってスキーマを検証・修正する機能は小さい。また無条件に事実在即してニュアンスを感じとり新たなスキーマが結実されていくという面が強い。このことはイメージ面接などの内的イメージ・感情体験において最も顕著に観察されることである。

もちろん心的イメージにおいても、とくに自分自身あるいはその明らかな象徴が、主人公として行動している時には（被験者自身は受動的注意集中にありながらその能動的生きる姿勢を反映して）その生きる姿勢のシエマをイメージ的に検証している面が見られる。それは、自己像として環境像から比較的分化し、環境に不整合であれば、自己像すなわち「生きる姿勢」の方を修正するという原則によって治療・成長過程を成立させている（知的概念的自己吟味とほぼ同じ側面である）。しかしより心理的治療ないし自己調節的な意味が強調されるのは、自己・環境不可分の関係性体験（一般化象徴化された再体験）であり、われわれがふつう、イメージ面接で感じとっている自己像とは、そのような関係的な（対象像をも含んだ）象徴的自己である。その関係性において喜怒哀楽の感情も生き生きと展開するし、外界の美しさ、暖かさ、恐しさ等々もリアルに再体験される。それが今までの「感じ方」のシエマを超えてより無条件におとずれるようなものであり、新しい「感じ方」を与えてくれるがゆえに、それが治療的变化に結びつくことがまさに重要なのである。

このように、内的感情体験においては、従来の認知理論を超えた受動的・非固定的な面が重視されざるを得ない。このことは、おそらく我々が日頃問題にしている投影による内的・感情体験的な自己表現・自己洞察の不可避性に関係するものである。

4. 内的シエマの投影と自己表現

われわれが、人間学的に問題にする体験的シエマとその照合過程は以上のようなものであるが、ここで特に内的自己・感情に関しては、何らかの投影法に依存してのみシエマが可視的になり、より明確に構造化された自己表現・自己認知が可能になる。概念言語への投影を除けば、これらすべての投影が象徴的自己表現だと言える。

注) 外的適応においては、行為や生活そのものが自己表現の意味をなし、それがシエマを可視的かつ検証可能にしている。それは通常「投影」とはよばれないが、しかし常にある側面から「人間全体」を切断しているという意味では、外的経験もまたその生活場面への投影だと言ってよいわけである。

さて、投影媒体をモデルとした自己表現的照合においては、事態はさらに違ってくる。われわれが、内的照合と呼ぶ事象においては、その媒体の構造と内化されたシエマ（図1のC）との一致、不一致が問題になる。ここで主として問題になるのは、自己の内的状態（C）の修正・発展ではない。（内的状態のシエマは基本的には外的関係のシエマと同じであり、特殊な場合以外は外的関係性の体験すなわち実体験によってのみ修正・発展させられる。）内的照合において問題になるのは、むしろ投影媒体Dの方を内的状態にぴったりするように修正していく過程であり、典型的には図式投影法において最もピッタリする図式ができるまで、駒や棒を動かすようなことである。イメージ面接においても瞬間的に様々な可能なイメージを次々にあてはめては検証・修正して、最もピッタリするものに定着すると考えられる。これが、自己表現の認知力学であり、シエマが内的・感情的で構造がゆるいなど、柔軟かつ可視的な（ピッタリした）モデルによってこそ、検証・修正・創造すなわち自己洞察と認知変化が可能になるのだといえよう。

注) 内的イメージについては別論にゆずるが、前節における能動対受動的構造的差異が準用され、イメージ面接が深まったときにみられるイメージの自律性は、取捨選択（試行錯誤）的なものでなく、より必然的な「流れるがまま」の特性を強めるとみられる。Gendlin の

implicit な過程に近いものであり、今後の重要な課題である。

おそらく、内化されたあるシエマ（潜在的自己概念のようなもの）によって、そのひとつの投影として（自己イメージの一種として）心的イメージや芸術・図式作品が作られ（選ばれ）、それがあたかもコンピューターモデルのような役割を果たす。それに内界すなわち記憶を含んだ内的体験をあてはめてイメージや作品（に示された自己概念）を検証・修正するという意味で、この過程は、認知心理学的に言うシミュレーションに相当する。

もちろん人は、日常生活において（投影法や芸術を使わずに）自己概念すなわちシエマの検証をしている。内化を伴わない、現実生活での生きる姿勢ないし体験様式の検証も、広い意味では自己概念の検証だと言えるが、狭義には内化された自己概念が（再体験を般化したその極として）象徴化され、夢、想像、日常的思想、その他の固有の自己表現によってモデル化されている。とくにたとえば、比較的純粋な自己表現的遊びにおいては、（心理療法と同じく）その遊びをモデルとして内的経験の情報に関するシミュレーションと自己調節が成立しているのを見ることができよう。この場合、検証や自己調節は、必ずしも意識的である必要はない。極端な例として寝返りなどに見られる身体的自己調節の過程は、最も無意識的な過程であるが、しかし身体運動への投影とその検証という基本は備えている。ここにもわれわれが、認知心理学を超えて潜在構造を問題にし、かつ有機体理論との統合（次節）を必要とする根拠がある。

5. 未解決な諸問題と総括

以上、シエマとその検証の観点から見た様様な断面をできるだけ総合的に見てきた。しかし従来の心理学や精神分析との関連におい

て本論が矛盾ないし異ったニュアンスを示している問題、とくに本論自体が未解決な問題は指摘しておかねばならない。

感情のエネルギー的側面に関する従来の理論は、動機づけの理論とも相まって構造化の原因論的側面を問題にしている。内発的動機づけの理論が示すように、「動機」は、シエマではなく構造化を促進するもの、あるいは不整合によって誘発されるところの別次元の事象という側面をもっている。しかし少なくともわれわれが体験する「欲求」とは、構造を持ったものであり、図1のように位置づけなければならない面をもっている。構造論的に見たこの欲求の二重性、すなわち構造の一側面でありながら全構造の基礎をなすということのをわれわれは認めなければならない。

同様に感情も、Sullivan, Kelly, 大熊（1979）らが示すように構造の不整合や調節過程の結果として起ることも確かである。不整合が不快をもたらし、その予期が不安をもたらすなどである。この場合感情は、シエマの修正の循環過程から一応遊離した随伴事象として見られるか、あるいはそれがエネルギー側面として循環にはね返ってくる意味も持つ（困難や絶望にもかかわらず探索・修正を続けるための動機づけともなる）。また欲求不満反応、防衛機制を結実させることにもなる。大事なことは、防衛機制なども含めて、やはり感情が（その情動的に単純化された面においてさえ）一面では図1の構造の一側面でもあるという二重性である。いわんや広義の感情体験は図1の左側までを含む総体的なものである。「感情は人間の適応生活の随伴事象として遊離した排泄物でもあるが同時にそれは、心の本質的一側面である。」と表現すれば、矛盾こそが本質だとうなずけるであろう。実は、知的認知でさえ二重、三重の性格をもっているもので、単純化した整合性をわれわれは求めることはできない。

ここで筆者が「パーソナリティ」（水島1980）

で詳述した矛盾の相補的統合を一応除外して、できるだけ整合的な多次元の循環的層構造理論への努力をするならば、例えば、図2のようなヒエラルキーを設定できる。図2は感情の安定・不安定を主題としたものであるが、複雑な意味体系としての層構造だといってよい。最下辺、すなわち生物学的エネルギー側面については、省略するとして、次の第1次の層においてはPavlov—Eysenckのいう意味での神経系の安定性—不安定性が考えられる。ここで不安定性の高い人の場合を例に

とれば、表2の第2次の層としてより複雑な均衡化が発達する。それでも不均衡な場合はさらに第3次的に防衛的均衡化を含んだより複雑な(ときに病的な)均衡化を発達させ、それでもだめな場合は、さらに4次の5次に何らかの個体内構造化の悪戦苦闘をするであろう。ここまでの構造を図2では、認知理論に準じてまだ概念化できない構造(N)(N')と記しておく。実際には、不安定なNはさらに個体をこえた層において、関係性レベルでの均衡化(例えば依存できる対象を見い出し

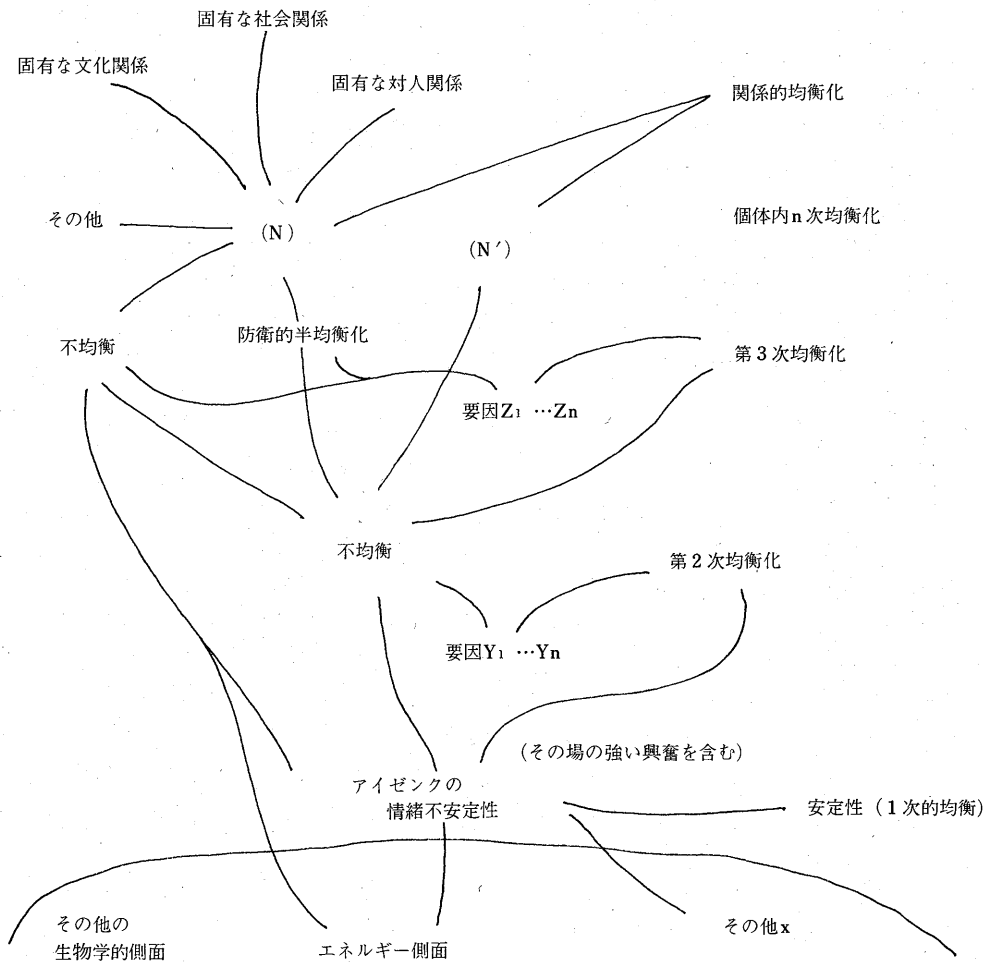


図2 安定—不安定に着眼した感情の階層

てその限りにおいて安定すること) 文化的均衡化(例えば芸術に専念する生活様式において安定をうること)などを工夫する。

さて個体レベルで(N)の次元だけで見ても感情の安定性は、第4次の構造の整合性によるだけでなく第3次以下の要因、あるいは第1次以下のエネルギー的側面からの直接の影響も受けている。もし構造原理のみによって体験事象をとらえようとするならば、これらすべての層の次元が含まれなければならない。それをも広義の認知とみなせば別であるが、現在の認知理論のおよぶ範囲は、せいぜい3次、2次程度の所までであり、深層次元から直接Nに到達する感情体験までを含めるためには、本論におけるような便宜的二元論・多元論をとらなければならない。(もちろん図2の上から下への流れを含めた循環を含めてである。)

筆者は、「人間学」(1977)において葛藤を前提として、感情の構造が複雑化していく過程を明らかにしてきた。それは終極的には、結合と破壊、進歩発展と停滞衰退、生と死の葛藤という人間学的根本問題につながっている。

一方基礎的事象としては、図2の構造は脳神経系における葛藤調節、その他の有機体的葛藤と調節にかなり対応している。認知科学理論ないし人格理論としては、この有機体理論との対応が、おそらく最大の課題になると思われるので、最後にその点をごくざっと述べておきたい。

ここで有機体理論とは、Goldstein, Maslowらの狭義の人格理論ではなく、Piaget, Bowlbyらの認知・システム理論を含む。すなわち主観的認知構造とその修正発展を、脳・神経システムと過程に対応して、さらには、身体全体の自己調節・成長過程と対応してとらえようとするのである。(ただし対外的適応を原点に展開した点から言うならば、本論は関係のオープンシステム理論の方により近いと言うべきである。)本論ではわれわれは認知

的・現象学的に主観の構造のみを問うてきたが、さらにパーソナリティ全体の解明にまで進もうとすれば、やはり身心過程の対応が明らかにされてきている諸事実に立脚し、とくにゲシュタルト療法や心身医学に示される精神身体的シエマとその同化・調節過程を検討していかなければならない。この対応ないし相補性が明らかになってこそ、本論の諸有機体論的側面も正当性を増すであろう。

有機体理論、身体過程との関係において、今後吟味しなければならないひとつの問題は、身体感覚・内部知覚の問題である。これはひとつには、本論で内化としてとらえてきたものの少なくとも一部が「内部環境」すなわち認知主体から見たときの一種の環境となり、この場合「胸がしめつけられるような」とか「頭に血がのぼるような」という感情は、身体過程に対応をもつ比較的要素的情動(エネルギー側面が強い)でありながら、メタファー・イメージとしても重要であり、しかもそれへの対処のしかた(シエマ)は、あたかも外界の事象に対するような面を含みうることである。しかもそれは、視聴覚と同様の位置づけを持ち、認知過程とは、これらあらゆるモダリティの総体(Neisser)であるから、この面でも有機体的過程は対応しているわけである。

注) ついでながら Neisser が、とくに触覚について①特定の感覚機関によらず②神経系の情報ルートを特定できず③刺激と反応の区別が明確にできない、と述べていることは、内部感覚においては、一層あてはまることであり、これら未発達の研究領域を含めて内的感情体験が有機体論的に解明されていく必要がある。

以上のほかにも認知・現象学理論と有機体理論の接点は数多く問題になる。いずれにしてもわれわれが、主観的認知理論を、感情を含めた全体的主観としての体験的認知の理論

にまで発展させるとき、その客観的側面としての有機体理論、さらには精神力学を含んだ客観主義的人格理論をすべて問題にせざるを得ないであろう。その問題点の多くは、前著（水島1980）で展開したが、とくに主客の統合にむけてのイメージモデルを中心とした理論は、本論と不可分のものであり、「体験を科学する」とは、まさに主客の相補性によってのみ可能なことだと言わなければならない。

文 献

Gendlin, E. T. (1964) A theory of personality change
Kelly, G. A. (1955) The psychology of personal

constructs, Norton

木村重信 (1971) はじめにイメージありき 岩波新書

水島恵一 (1977) 人間学 有斐閣双書

水島恵一 (1980) パーソナリティ 有斐閣双書

Neisser, U (1976) Cognition and reality (古崎・村瀬訳, 1978『認知の構図』サイエンス社)

大熊保彦 (1979) 認知的情動論の試み 人間科学研究第1号, 文教大学

(1980年9月22日受付)

(注) なお、本研究は一部を文部省科学研究費によっている。